

# 自分自身(ヨゼフ・アベイヤ司教様)について

## 自己紹介

- ・ 出身地は、今問題になっているスペインのカタロニア地方。1973 年来日。
- ・ 助祭叙階式は名古屋。相馬司教様から助祭叙階式を受けた。
- ・ 1991 年に日本の管区長になった。
- ・ 総会で総長顧問会議に選ばれ、24 年間、本部の仕事をした。12 年間は総長顧問会の福音宣教の担当責任者として、残りの 12 年間は総長として。
- ・ 約 70 ヶ国で私たちは働いているので、何回かそこを回った。その中で、いろんな教会の姿を見ることができた。教会だけではなく、色んな文化や社会状況とかに触れることができたので、色々と考えさせられたことがあった。
- ・ 2015 年に日本に帰ってきた。そして前田大司教様の補佐司教になった。

## これまでの歩み

- ・ 学問的なことではなく、私自身の感じていること、体験してきたことから、考えさせられることを皆さんに分ち合う。
- ・ 1969 年から 73 年まで神学を勉強した。第二バチカン公会議が終わったところだった。解放の神学が生まれた時でもあった。そして、資本主義そのものである日本に派遣されることになった。
- ・ 来日した頃、名古屋の信徒総数が 40 人の教会に派遣された。他の神父は幼稚園の園長をやっていたが、月曜から土曜日まで、私は何をすれば良いのか、何のために日本に来たのか、自分の国(スペイン)に残れば、また、アフリカ、南米、フィリピンでも派遣されたらすれば、たくさんの方ができたはず。神父とはいったい何か、福音宣教とは一体何なのか、自問する日々が続いた。
- ・ 人に福音を宣べ伝えて教会に連れてきて洗礼を授けるということならば、私は大失敗。私が名古屋にいた時に、誰も洗礼を受けなかった。
- ・ だから道を探していて、私は JOC の活動に行くようになった。そこは学びの場となった。そこで出会う青年たちは、福音に照らされて、自分の生活の見直しとか、仲間に対する心遣いとか、人の感じ取る痛みを自分の痛みとして受け止めてどう変わっていくか、そういうことに向き合っていた。大きな恵みだった。
- ・ もう一つは、私たちの教会の地域にできるだけ入ってみた。そこでその時、経済的にあまり豊かでない国とのつながり、人権のために働くグループがあった。そこに入れてほしいと頼みに行った。それも大事だった。
- ・ 教会ではだいたい「いらっしやい」を言い慣れている。別の人たちがやってるグループに行くと、別に司祭であるということに、特別な肩書きは何もない。ただ共通するのは、今、世界のどこかで人間としての尊厳が踏みつけられている人に対する心遣い、それが大事だった。
- ・ そして地域のコーラスにも行った。できるだけ地域の中に入ってみた。私はずっと瞑想するために日本に来たのではない。観想修道会の召し出しを受けていない気がしたから。

## 日本で体験し、学んだこと

- ・ 教会に「いらっしやい」という発想だけではダメ。できるだけ人のいるところに出かけていく、それが大事だと思う。
- ・ 私たちは、どのように福音宣教をやっているか、ということが大事だと思う。
- ・ 日本人の召し出しが大事。
- ・ カトリック高校連盟に携わった。高校生より私にとって勉強になったのは、スタッフになっていた大学生、若い社会人。本当に頭が下がる。そういう青年たちから、高校生の中に入って働くという大切さを学んだ。
- ・ 枚方教会での青少年合宿やそのリーダーと関わることで、大きな勉強になった。人が色んな意味で信徒として育つのは、講座よりも、そういう活動に携わって、そこから来る問いかけを考えさせられること。その子どもたちから伝わってくる質問、それに対して大人としてどのように答えるか、その中で色んなことを学び、考えさせられた。
- ・ 釜ヶ崎での出会いも大事だった。毎週の夜間パトロールに行ったとき、野宿者の方たち、活動している司祭、シスター、信者さんとの関わりの中で、あまり目を向けていなかった新しい現実を知らされた。
- ・ そこで活躍している信徒の印象的な言葉。「私は神の子です。私は毎日 3 回食事をしてい

ます。泊まる場所もある。釜ヶ崎では、同じ神の子で、毎日 3 回食事ができない、夜泊まる所もない、そういう人たちがいます。」

- ・日本の社会の中にこういう人たちがいる。私たちはもっとその人たちに目を向け、そこから伝わってくるメッセージを把握することが大事。こういう中で、宣教とは何かを考えさせられた。

## 日本での宣教について

### 宣教とは

#### 1 派遣されたところで福音を生きる

- ・幼稚園だろうが、小教区であろうが、それは大きいだろうが小さいだろうが、田舎だろうが都会だろうが、その中で本当に福音を生きるということは、自分にとって信仰が本当に大事なんだということ、それを証しする。
- ・この人は信仰が大事なんだなと感じてもらおうこと。関わっていく中で、人がそれを感じるとすれば、それは福音宣教だと思う。

#### 2 人と関わる

- ・人と関わるということは宣教の基本だと思う。どのようにどのような橋を作ってその関わりをするのか。
- ・人と関わるのは楽しみでもあるが、やはり本気で関わるのは面倒。でも、関わること。

#### 3 教会共同体と共に歩む

- ・小教区だろうが教区であろうが、日本の教会と共に歩むということは、証しになる。
- ・日本の教会は小さいが、その中で足を引っ張り合うという習慣もある。それは残念。それは宣教の大きな妨げ。

#### 4 新しい道を探し続ける

- ・そこで宣教師たちの役割が大事。見つけるか見つかないかは別として、新しい道を探し続ける。何かを探してみる、それは大事だと思う。
- ・疲れた、もうこれでいいんじゃないか、そういう誘惑を私は感じる。また、何か新しい提案をすれば、でしゃばっているとかわられる。でも新しいものを探し求めるということ。

### シノドスが修道者、奉献生活者に願うこと（新しい福音宣教での独特な貢献）

#### 1 神さまが大切な方であることを証ししてください。

- ・何よりも、誰よりも、神さまが大切な方であることを証ししてください。これは、自分の生活を通して証ししてください。
- ・先ほど、私が言った派遣されたところで福音を生きる。本当に私にとってこれは一番です。

#### 2 つなぐ力を証ししてください。

- ・現代社会の中は、本当に色んな分裂にさらされている、あるいは個人主義が非常に重んじられている。
- ・この現代社会の中で、あなた方の共同生活を通して、福音が持っている、人と人、国と国、グループとグループをつなぐ力を証ししてください。
- ・だから共同生活は大事である。共同生活は皆同じところで、朝から晩まで住むということでない。昔と今とでは、状況が変わり、共同生活のあり方も変わってきている。昔はだめ、今は良いとは言わない。昔は共にいるということが大事だった。
- ・今、私たちが強調するのは、共に生きるということ。共にいることから共に生きるということが大切。
- ・時々、司牧的な理由、何かの理由で、どうしてもバラバラに住まなければいけない時もある。そうならば、絶対に週 1 回は一緒になり、共に祈り、共に識別し、共に兄弟であることを祝ってください。共同体の計画、プロジェクトライフ、兄弟として、共同体としてのコミットをはっきりと表明する、それを実行することが大事。
- ・私たちの共同生活は、一つの宣教の言葉。何も言わなくても喜んで共にいるということ。

#### 3 福音宣教の最前線に出かけて行く準備をしておいてください。

- ・修道者は誓願を立てている。自由になっているはず。だから福音の最前線に常に出かけて行く準備をしておいてください。

# 福音宣教の最前線

## 1 地理的な最前線

- ・福音がまだ伝えられてないところ。ネパールやモンゴルなど。

## 2 文化的な最前線

- ・今、現代社会、科学の進歩、いろんな考え方、文明が変わったことで、新しい課題を持っている。そういう現代社会との会話に、責任を持って入るように準備してください。
- ・現代文明のそういう新しい価値観、物の見方は、信徒の中に入っている。だから、そこから生まれてくる新しい課題、それを対話できるような人間になってください。

## 3 社会的な最前線

- ・貧しい人、疎外されている人、差別されている人たち、排除されている人々のところに行ってください。
- ・教皇様は、私たち総長や管区長に言った。「人事の時、皆のリストがあって、私たちの色々な事業や小教区とかがある。まず、理事長、校長、施設長とかを決めていく。最後に、貧しい地域、スラムに派遣する人は誰が残ったか、そして、その人に行きなさいと言う。こういう決め方を絶対しないように！そういう所に行く人は、よほど靈的にしっかりとしていなければ、長続きしないですよ。そのような地域に優れた方を派遣してください。」

## 日本の教会の歩み

- ・ナイスでは、まだキリストの食卓に囲まれてない人をキリストの食卓に招きましょう、ということと、日本の社会の福音化に私たちも貢献しましょう、この二つが基本方針だった。日本の社会の中に、福音に沿っていないところがいっぱいあるから、福音的な芽生えが膨らむようにしましょう、ということ。
- ・これを実行しようとしたとき、私たちは大事な問題に気付いた。それは信仰と生活の遊離。教会と社会の遊離だった。その遊離を乗り越えていかないと、福音が伝わらないだろうということ。開かれた教会作りをしましょう、ということ。
- ・だから社会と共に歩む教会、生活を通して育てられる信仰、そして福音宣教する小教区、という三つの柱。

## 養成について

### 信徒養成

- ・日本の信徒の養成は、少し内向きだと感じている。集会祭儀について、ご聖体を持っていくかいけないか、信徒には何ができるかできないか。そしてもっとひどいことは、ミサの時にろうそくを何本立てなければいけないか、それを真剣に問題にしている。
- ・何が大事なのか。私は信徒養成を考えた時に、すぐ思いつくのは講座。典礼講座、聖書講座、カテキズム講座。それも大事。もちろん信仰に対する理解を深めなければならない。ただ基本的なことがないとすぐに忘れる。だからいつも「信仰の喜び」という言葉を使う。
- ・基本は、やはり一人一人の信仰が、信仰を持っていて良かったと言える信仰になってほしい。たとえ信仰が負担に感じていたとしても、信仰が今喜びであると感じてほしい。

### 信仰を持っていて良かったと言える自覚のために

#### 1 振り返り

- ・自分の信仰の道を振り返る。私たちはそれを手伝う。それが私たちの使命。

#### 2 分かち合い

- ・個々に確認し合うこと。
- ・分かち合いの嫌いな人がいる。分かち合いのための、分かち合いアレルギーのための薬は、一つだけ、分かち合い。
- ・4, 5人ぐらいでちょっと確認し合ってくださいと言うと話が進む。もう時間ですよ、と何回も言わなければ止めない。なぜ止まらないかと言うと、やっぱり話したい。
- ・良いきっかけを作らないと信仰は育たない。

### 自分の信仰を語れる信徒

- ・自分の信仰を語れる信徒を私は育てたい。講座だけでなく、同伴すること。本当に信仰を持って良かったとなかなか説明できない、言葉にならない。だから私たちも忍耐強くそれを手伝うこと。
- ・信仰を持って良かったということは霊性ということ。霊性を深めることは日本の教会にとって大事。そして養成も大事。養成は何か。やっぱり自分の信仰を語れること。

## 福音宣教を中心に置く

- ・評議会の規約を作らなければいけない時には、どういう委員会を作ればいいのかとか、みんな必死になって意見を言う。規約を作ったあとは安心し、皆規約を忘れる。規約があるということで安心する。
- ・バザーの時に、焼きそばにするか、ちらし寿司にするか、皆意見を出す。でも、この教会で、この地域の中で、どのように福音を伝えていけばいいか、という時には沈黙が長い。というのは、信者さんは福音宣教をしたくないというわけではない。何を言えば、どう言えばいいかわからない。
- ・私たちはそれをファシリテート(円滑に進める、手助け)する。雰囲気作り。適切な質問を出す。
- ・会議の中で、この10分は3人で話してください、と言ってみる。3人で話すとは何かが出る。その後、自分の意見を言うのは恥ずかしいが、3人の意見として出す。これはもっと出しやすい。自分はこう考えているというよりは、私たちはこう話したということ。何かそういう工夫が必要。
- ・識別は大事。良い識別ができるために、その識別の基準をはっきりしないと識別ができない。基準は福音であって、教会の教えである。教区の方針。それは識別の基準。それを基準にして、何をすべきかということ。
- ・各教会に、ある程度のビジョンを作らないといけない。半ページでいい。大したものでもなくてもいい。ただ何を大事にしたらいいか、どうして大事にしたらいか。それを決めたらいい。そしてそれを大事にするために、あなた自身が何をやるか、どういうふうにご貢献するか、こういう具体的なことが大事だと思う。

## 修道会について

### 小さくされた人々と共に

- ・どの管区も、誰かが、虐げられている人、障害されている人々の活動に関わることが大事。その人の興味ではなく、管区にとって大事。そういう兄弟たちは、私たちにいつも大事な質問を問いかけている。
- ・クラレチアン会はしばらくの間、釜ヶ崎に拠点があった。そこで神父とブラザー二人が、ホームレスの人たちと一緒に野宿をしていた。毎週一回、二日間は修道院に戻ってきた。彼らが謙虚に自分が感じたことを分かち合ってくれたことは大きな刺激になった。
- ・彼らは、「お前たちは本当に楽に住んでる、何をしてるんだ。」と自惚れた態度ではなかった。あなたは幼稚園で、あなたは小教区で、あなたは養成担当者として、働きを評価しながらお互いに支え合っていく、それはとても大事なことだと思う。私もあなたがそこにいてくれる、それはどれだけありがたいか。

### 修道会のカリスマ

- ・修道会は人材派遣センターではない。聖霊から一つのカリスマを頂いてる。私たちはそのカリスマを大事にしないとけない。そういうカリスマに基づいて私たちは派遣された。私たちの預かってる小教区、幼稚園は、このようなカリスマの特徴がなければいけないと思う。
- ・修道会の一つのカリスマを与えられているから、それを生きてほしい。オペレート会とクラレチアン会はそんなに違わないと思う。宣教のカリスマである。その宣教という心を持っていくということは大事。それは特別なことをするのではなく、私たちの心が前向きであること、何かを探し求めること、これで十分ではない、そういう心を持ち続けること。

## 新しい本の紹介

- ・インタビューされた教皇フランシスコ「奉献生活について」。この本は、非常に面白い。まもなく日本語で出るだろうし、短い本だから勧める。召命の力になる。





Oh You have  
been, right be  
Leading us al  
the way. An  
made it thro  
You made it thro  
Because of

Oh You have  
been, right be  
Leading us al  
the way. An  
made it thro  
You made it thro  
Because of

























